

『動きすぎてはいけない』

第2章 関係の外在性—ドゥルーズのヒューム主義

2-2 差異＝分離の原理

当然の話ではあるのだけど、2-1からの連続性の中で展開されている。気になったまとまりに対して思ったことなどを書く。太字は引用箇所、特に気になった、引っかかりを持った言葉たち。

先ほどの引用における「諸々の知覚の流れ」というのは、区別された複数の知覚の継起のことを意味している。その背景には、原子論という前提がある。ヒュームの立論において、知覚される所与はそもそもバラバラ(離散的)である。さて、そうした所与のコレクションそれ自体である様々な知覚者=精神もまた、互いにバラバラである。バラバラの所与たちの集う非人称的なゾーンとしての精神も、バラバラに散在している。そうした精神たちの一例が、たとえば私であり、あなたであることになる。表向き『経験論と主体性』は、人間＝「私たち」の「主体化」(システム化)を論じている。しかし、明視されるべきは、人間＝「私たち」を中心にしらない主体化論である。(P.113)

⇨離散的の言い換えとしてのバラバラ。バラバラと離散的では、だいぶ印象が変わるように思いつつも、バラバラという表現はイメージをしやすくなるような気がする。

⇨主体化という言葉そのものを見る時、特定の存在があるというイメージを思い浮かべるがそうではない。

⇨2-1では、「既存の《私たち》からではなく、事物の関係の変化から発し」と書かれている。

⇨また「無人のイマジネーションからすべてが再開し、私、そして私たちらしきものが、鳴り止まないノイズの中で形成されてくるのだ。」

⇨動詞の束によって形成される主体化

差異＝分離の概念は、原子論にもとづく。ならば、差異＝分離というイコールの妥当性は、原子論の妥当性に依存するわけである。ドゥルーズのヒューム解釈における原子論のステータスについては2-7で論じる。本節では、原子論の前提から発して、〈信念、恒常的连接をバラす＝原子化する＝解離させることができるかどうか?〉という問いへと向かうことにしよう。(P.114)

⇨ヒュームに則(のつ)っての「差異」の概念、それは「分離」「判別」「区別」のことである。

⇨「ここでは「分離」で代表させる」ということになっている。

⇨「恒常的连接をバラす」における「恒常的连接」は2-1に出てくる。AB、AB、AB。ABは何であってよい(ことに注意してほしい)。

⇨「ヒュームにおいて因果性の信念の成立は、知覚＝出来事の意味的な断片のあいだの第一次的な非意味的接続であり、それこそが、意味のゼロ度には他ならないのである、と」

『人間本性論』において、差異＝分離の原理を初めて登場させる箇所では、「空想fancy」の説明をしている。空想の分析をすれば、「想像がその観念を入れ替えたり変化させたりする自由をもつ」ことが、一般的に、空想的でない信じられる経験についても、理解される。すなわち、「詩や物語に見られる作り話」のなかでは、「自然の秩序がまったく混乱させられ、話に出てくるものといえば、翼をもつ馬や、火を吐く竜や、とてつもない巨人といったものばかり」であるが、ヒュームによれば、「空想力のこの自由さ」は、「我々の観念がすべて印象から模写されるということ、および、まったく分離できない二つの印象など存在しないということ」に拠っている。(P.115)

⇨聖書(ヨハネの黙示録など)に描かれている描写も、人間の「空想力のこの自由さ」において、「何であってよい」ということ。ありえないもの同士がつくつくともあれば、離れることもあるし、そういう意味的なものではない、非意味的接続がある。

原子論は、連合の解離可能性の原理として機能するのだ、と。連合の解離可能性、それは、ファンシーないしフィクションの原理である。さらに言えば、あらゆる経験は、原理的に、フィクションとして連合され・解離され・再構成される。(P.116)

⇒「ヒュームによれば、「観念のあいだのこの統合原理は、分離不可能な結合力と見なされるべきではない」とされる。そこで、本稿では、次のように考える。」と前置きして、書かれている文章。

⇒ファンシーという言葉の意味について調べる。(Weblio辞書 英和辞典・和英辞典)

(気まぐれで自由な)空想、(詩人・画家などの)創造的空想力、(事実に基づかないで想像された)思いつき、気まぐれな思い、思いつき、感じ、(個人的な)好み、嗜好、愛好

⇒「あらゆる経験」は、自由に編集されうるということか。

本稿では、解離という語によって、人格の同一性もバラバラにしてしまうヒュームの不穏さ ―カントにおける超越論的統覚の揺るぎなさの正反対― を、現代の「解離性同一性障害」(多重人格)に近づけて扱いたいと考えている。ヒュームの連合説は〈解離説〉でもあるのだ。(P.116)

⇒多重人格という症状というか、状態において起こっていることが、連合説であり解離説であるという見方ができるということか？

人間＝「私たち」のみならず、あらゆる精神たちは、虚構的であり痴呆(ちほう)的である。ドゥルーズは、そのように見据えている。連合-解離説は、事物の狂ったブロック遊びである。私自身は、人格の複数のサブ・システム(分身たち)、所与のサブ・コレクションのブロック遊びなのである。『経験論と主体性』は、「実のところ、関係はフィクションである」と断っている。(P.116-117)

⇒第2章の2-1では、「ヒュームの連合説は、非意味的な断片である知覚が、どのように意味化されるかの説明であると言える。」と書かれている。

⇒事物の狂ったブロック遊びという表現が面白い。狂ったということなので、ありえない積み上げをしたりして、積み上がらないことが起きたりするということか。事物の狂ったブロック遊びが実際にどういう状況、状態であるのかということイメージしてみる。

「項が真の原子となる」というのは、区別されるだけの匿名の変項を考えることだ。第1章での〈別のある匿名性〉である。それらのあいだで「関係が真に外在的な経路となる」。連合は、項の何たるかに依存せず、解離・再連合されうる。差異＝分離の原理と、関係の外在性にもとづく哲学、それは「とet」の哲学である。「全体化不可能」な断片と断片の外在的な関係が、生成変化するのである。世界の断片化、非-全体性、それは、ヒューム―ドゥルーズにとって、どういうことなのか？(P.119)

⇒問いとして、提起されている。ここまでの内容ではよくわからない。

ヒュームの原子論は〈フィクションとしての實在〉の原理である。これは、ドゥルーズの「差異の存在論」が、ベルクソン主義 ―ベルクソンは、心理学の「観念連合説」を批判していた― を継承していることに比べて、重視されてこなかった。次に挙げるマルク・レーリの解釈は、そうした態度の一例である。(P.119)

⇒ヒュームの原子論は〈フィクションとしての實在〉の原理 < ベルクソン主義

⇒レーリの論文では、C・D・ブロードの論を用いながら、ヒューム自身の説明に即して、原子論の必要性を削減しようと努めている。(P.120)

⇒『人間本性論』では、感覚の「最小体」を発見するための実験として、「紙にインクの染みを付け、その染みを凝視したまま、ついにはそれが見えなくなる距離まで退いてみよ」と言う。(P.120)

本稿では、ドゥルーズの歩みにおいて、ヒューム主義の文脈それ自体が解離するかのよう、断片的に自律して作動する局面を、前景化している。實在の連続性を優先するドゥルーズと、虚構の離散性を優先するドゥルーズ ―両者のあいだの「と」に、これから私たちは、直面せねばならない。(P.120)

⇒両方が同時にあるということ。

以上